182

阿多貝塚（あた）

（日置郡金峰町阿多）

位置と環境

金峰町は，薩摩半島中程に位置する。東は金峰山，西側は東シナ海に面し，南北約40㎞におよぶ吹上砂丘が形成されている。内陸部は万瀬川や伊作川などの中小河川によって形成された幾重にも延びた低丘陵の台地や沖積平野が広がる。

この中にあって阿多貝塚は，火山灰台地と沖積平野の境界となる田布施平野の海岸線より内陸部に約3.7㎞のところで，北西に突き出た標高約９ｍの台地基部が幅約150ｍで，面積1.5haの舌状台地に位置する。台地の後背地は，シラス台地が断崖となって迫り，国道270号線が台地を横断するため削平されている。台地の先端部は基部より比高差約３ｍの傾斜をもつものの，台地全体はなだらかな平坦地となっている。三方は田圃に囲まれ，現在水田との比高は基部で５ｍ，先端部で３ｍとなる。また，台地先端部は，幅約13ｍほどの堀切りのため寸断されているが，これは藩政時代以後の加世田～田布施間の主要道路の名残りである。

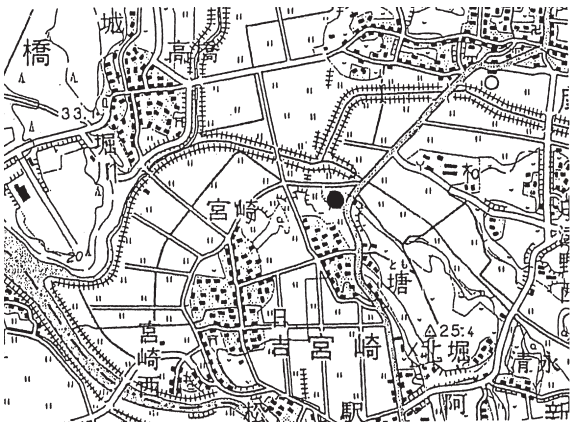
調査の経緯

金峰町は，県営ほ場整備事業御新田地区内に，周知の遺跡である阿多貝塚が含まれていることから，県教育委員会，県農地整備課，伊集院耕地事務所とその取り扱いについて協議し，その結果，当遺跡地は事業の見直しを行ない設計変更して遺跡に及ぼす影響を最小限に留めた。

調査は，国庫補助事業として貝塚の確認調査をすることとなった。確認調査は，昭和53年（1978）１月31日～同年３月４日に金峰町教育委員会が調査主体となり，県教育委員会の協力を得て実施した。調査対象面積は1.5haである。

遺構と遺物

阿多貝塚は，すでに明治の頃より当地から貝殻が散布していることから「貝殻崎」と呼ばれ，寺師見國等の発掘調査の結果，縄文時代の貝塚であることが立証されている。この遺跡から出土する土器には，貝殻条痕文に「みみずばれ」状の凸帯文が施されることを特徴とし，三森定男は阿多の地名をとり「阿多式」と呼んだ。その後，寺師見國は熊本県轟貝塚の出土土器である轟式土器との関連から轟式土器として紹介している。以後，阿多式土器は轟式土器に包括された。轟式土器はＡ～Ｄに分類され縄文早期～前期に比定された。



第１図　阿多貝塚遺跡の位置

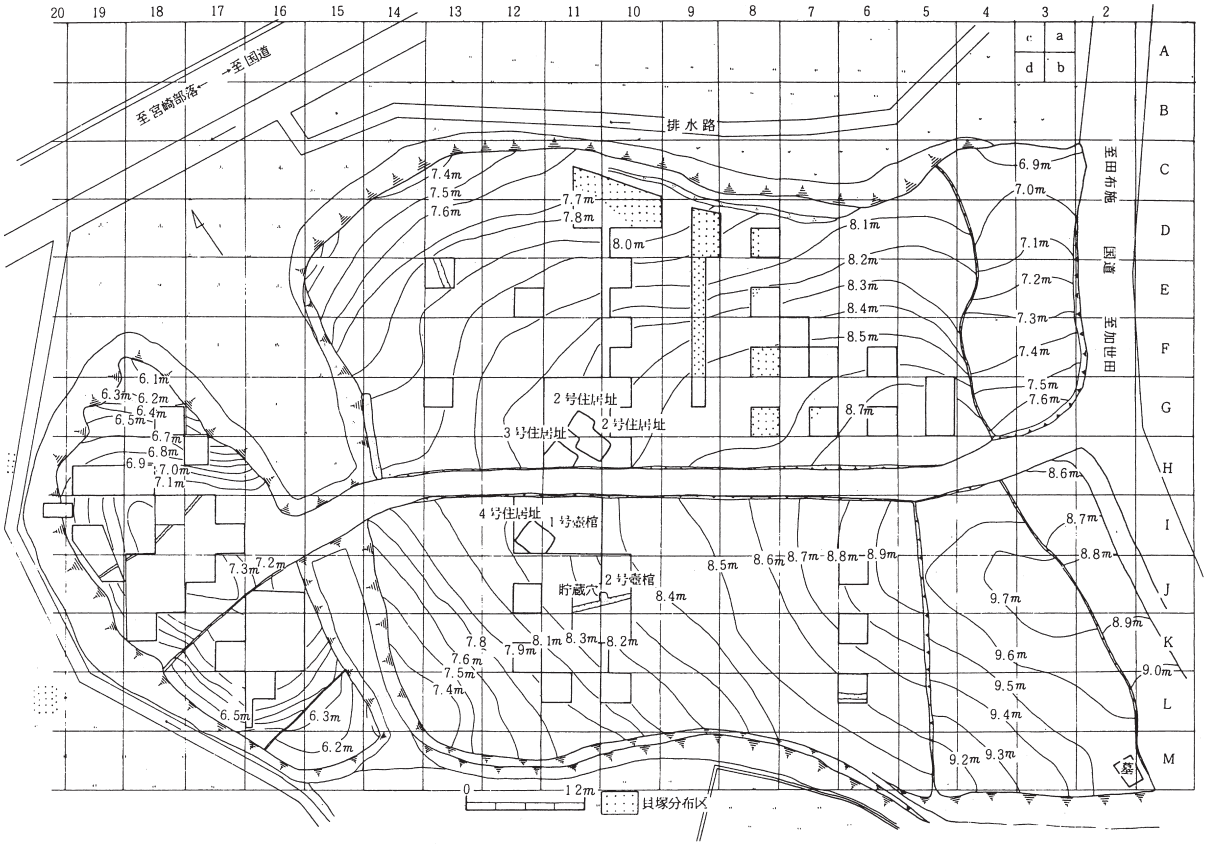
今回の確認調査は，貝塚の範囲確認やそれに伴う遺構等の発見を主眼に進められた。

調査の結果，台地の２地点で貝層・貝塚が確認された。１か所は，縄文時代の貝塚は寺師見國等が調査した地点付近の北西台地先端部傾斜面で，わずか約４㎡の範囲で確認された。

２か所目は，貝塚の主体は台地中央部北東縁辺から台地ほぼ中央部に位置し，楕円形状に約600㎡の範囲で確認できた。貝層は台地中央部で薄く縁辺傾斜面にかけて厚くなり，Ⅱ層（黒色火山灰層）とⅢ層（黄色火山灰層―アカホヤ層）に挟まれて堆積する。貝層が最も厚い場所は上部２層に区別される。上部貝層は表土とⅡ層が混じり合った貝混土層となり，縄文土器や弥生土器が混在している。下部貝層は混在はなく縄文前期土器を含んでカキ・ハマグリ等ぎっしり詰まって基部で５㎝，端部で30～40㎝で堆積しており縄文前期の貝塚である。

そのほかに，貝塚に伴う遺構は確認できなかった。なお，弥生時代の土坑に埋納された壺棺や古墳時代の竪穴住居跡４軒が発見された。

縄文土器には，早期から晩期までの11類におよぶものであった。主体はⅢ層・貝層から出土する縄文前期の轟式土器，曽畑式土器，Ｖ類土器（轟・曽畑式土器との関連性がある土器群である。口縁部はほぼ直行し，砲弾形の器形である。文様は胴部から口



第２図　阿多貝塚発掘調査図

縁部にかけて全面に施し，刻み目突帯文，横線文，斜行文，押し引き文，羽状文，連点文など多種多様な文様からなる。）を主体に早期末の楕円押型文，塞ノ神式Aa，Ab式土器，中期の瀬戸内系の船元式土器，後期の阿高式土器，晩期の刻目突帯文の夜臼式系土器が出土した。弥生時代前期の甕形土器，壺形土器，中期の甕形土器，壺形土器が出土した。そのほか，土師器は口径11cm，器高25.5cmで，底部径５cmの短頸壺の完形品である。小さな平底から胴部中程が最大径で25cmとなり，頸部はしまり，強く屈曲して外反する口縁部でさらに端部は屈曲して内傾する。器壁は薄く，刷毛目調整が施されている。12世紀の埦や皿，須恵器の破片などが出土した。

石器には，石鏃，石匙，石斧，磨石，叩き石，剥片石器をはじめ，特記するものとして頁岩製の石庖丁，蛇紋岩製の玦状耳飾り，扁平で茎を有した鏃状みら骨角器などが出土した。

貝塚出土の貝類には巻貝８種，二枚貝３種の計11種がある。海水の性の巻貝であるハマグリとマガキが大半を占め，海水性のチヤマタマツバキ，アカニシ，イボニシハ，淡水性のマルタマニシ，ヒメタマニシ，陸性のツクシマイマイ，河口部汽水域・干潟に生息するイシマキガイ・フトヘナリ等が出土した。

獣骨には，鹿，猪の下顎骨，歯，大腿骨，頭骨などがある。

特徴

阿多貝塚の水田を挟んだ西側台地には縄文早期・前期の上焼田遺跡が所在する。本県には貝塚は少なく，中でも縄文前期の貝塚は，出水市荘貝塚が周知されているのみである。調査の結果，貝塚の保存状態は良好で，貝塚が形成された地点や範囲もほぼ確認でき，さらに新しい型式（阿多Ｖ類）の土器の発見など，南九州前期貝塚の研究・究明にとって貴重な遺跡である。

資料の所在

出土遺物は，金峰町教育委員会に保存・管理されている。

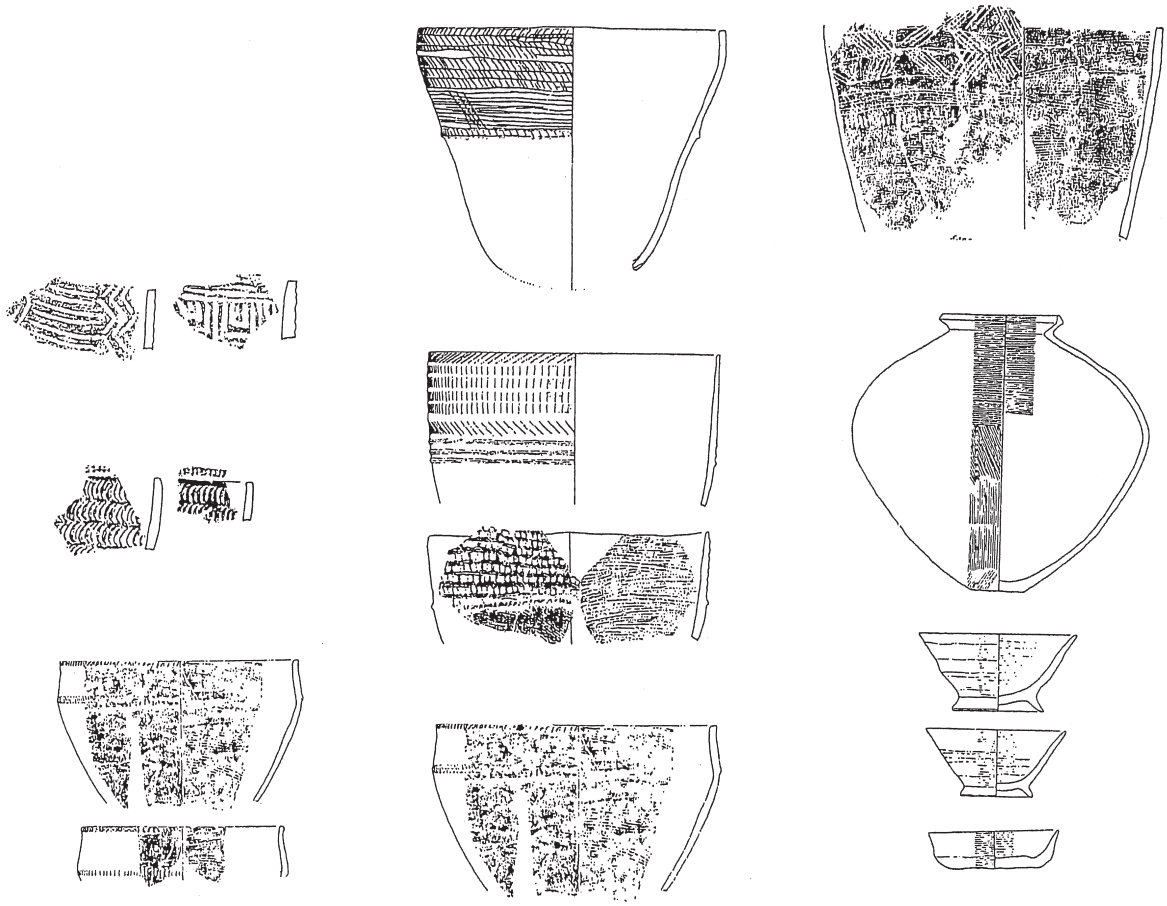
参考文献

金峰町教育委員会1978「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財調査報告書』１

（青﨑和憲）

写真１　阿多貝塚全景

写真２　貝層と出土器



第３図　出土土器